

ギデオン、エフタ、サムソン

"主が彼らを士師として起こされたとき、主は士師と共におられ、士師の日の間中、彼らを敵の手から救い出された。"

士師記2:18

ヨシュアの死後数世紀の間、イスラエルには明確な政府の取り決めがなかった。この間、誰もが "自分の目に正しいと思われること "を行ったという記録がある。(民数記33:52-56、士師記21:25)。ほとんどの場合、その傾向は不義に向かい、偽りの神々を崇拝していた。彼らの悪しき道に対する罰として、神はイスラエルの民が、命じられたようにカナンの地から完全に追い出されなかった敵によって圧迫されることを許された。(士師記2:13-15)。「それにもかかわらず、主はさばきつかさたちを起こし、彼らを略奪する者たちの手から救い出された。(16節)」。この記事では、3人の忠実な士師-ギデオン、エフタ、サムソンの生涯を検証する。

ギデオンはイスラエルの5番目の士師である。彼は、7年間イスラエルを圧迫していたミディアン人から隠すために、「ぶどうの木のそばで麦を」脱穀しているときに、天使の訪問を受けます。天使はギデオンに言った、"主はあなたと共におられる。(士師記6:11,12)。天使に対するギデオンの返事は、あまり熱心なものではなかった。この状況下で、主が彼とともに、いや、実際、イスラエルの民の誰とともにおられると言えるのか、彼には理解しがたかった。主が私たちとともにおられるのなら、なぜこのようなことが起こったのでしょうか。また、私たちの先祖たちが『主は私たちをエジプトから引き上げてくださったのではないか』と語った主の奇跡は、いったいどこにあるのでしょうか。

この返事は、必ずしもギデオンが天使の主張を疑っていたことを示すものではなく、おそらく、さらなる情報を得るための彼の方法だったのだろう。ギデオンは、神が過去に民を救い出すために奇跡を行われたのであれば、再び奇跡を行うことができるはずであり、このこと（ ）を確信したかったのである。主は御使いを通してギデオンに答えられた：「あなたの力で行きなさい。そうすれば、イスラエルをミディアン人の手から救うことができる。見よ、私

の一族はマナセで貧しく、私は父の家で最も小さい者だ」。

ここでギデオンは、主がその奉仕のために用いられたすべての者が持っていた特徴的な謙遜さを示している。彼の家族は貧しく、明らかに、ギデオンは自分が家族の中で重要でないと感じられるような状況であったため、主が彼を民の解放者として選ばれたとき、彼は驚き、ためらった。神はこの謙虚な男を安心させ、こう言われた。"必ずわたしがあなたと共にいるので、あなたは一人の男としてミディアン人を打ち負かさずであろう。(士師記6:16)。わたしは必ずあなたと共にいる」と主が保証されたとき、どんなに謙遜で弱い人間でも、主を信じることができれば、勇敢で勇気のある者となる。彼は主を疑わなかったが、自分と交信しておられるのがイスラエルの神であることを確かめたかったので、再び答えた。

そこでギデオンは主の使いに、「わたしがあなたのもとに来て、わたしの贈り物を携えてきて、あなたの前に置くまで」立ち去らないように頼んだ。使いは残ることを約束した。「ギデオンは中に入り、子ヤギー頭（若いヤギ）と、粉一エファの種入れをしていない餅を用意し、その肉をかごに入れ、煮汁を

鍋に入れて、櫛の木の下から主のもとに運び出し、それを献げた。(18,19節)。それから神の使いはギデオンに言った、「肉と種を入れない餅を取って、この岩の上に置き、煮汁を注げ」。彼はそのとおりにした。すると、主の使いは手に持っていた杖の先を出して、肉と種入れのない餅に触れた。それから、主の使いは彼の目の前から去って行った」。

主の使いは人間の姿でギデオンに現れた。奇跡的な神の力の現われと、天の使いの突然の消失によって、ギデオンは自分が誰と話していたのかを悟った。主なる神よ、私は主の御使いを顔と顔を合わせて見たのです。そして主は彼に言われた、『平安あれ、恐れるな。』

バアル礼拝の破壊

主の祝福が彼とともにあることを確信したギデオンは、イスラエルの民をミディアン人から解放する任務を進める準備が整った。そのために必要な準備が、この地のバアル礼拝の破壊であった。これはギデオンにとって厳しい試練であった。

主の使いは彼に言った、「あなたの父の若い雄牛、それも七歳の二番目の雄牛を取り、あなたの父が持っているバアルの祭壇を倒し、そのそばにある木立

ち（偶像礼拝に使われる神聖な木）を切り倒しなさい：そして、あなたの神、主に祭壇を、この岩の頂上の、定められた場所に築き、二頭目の雄牛を取り、あなたが切り倒した木立の木で、焼き尽くすいけにえをささげなさい。"士師記6:25,26

ギデオンはこの指示を実行した。彼は10人のしもべの助けを借りて、"主が彼に言われたとおりにした"。彼が夜に指示を実行したのは、父の一族の反応を恐れ、彼らがそれを発見する前に行為を完了させるのが最善だと考えたからである。ギデオンは、バアル（ ）崇拝者の激しい反応を過小評価しなかった。町の人々は、何が行われたのか、ギデオンに責任があることを知ると、彼に死ぬことを要求した。

彼らはギデオンの父ヨアシユにこの要求をした。しかし、ヨアシユは、息子が破壊したバアルの祭壇と木立を築いたにもかかわらず、ギデオンの命を要求する者たちにこう答えた。士師記6:31

ヨアシユは明らかに、バアルが自分の祭壇の破壊を防ぐことができなかったという事実に感銘を受けていた。賢明な彼の同情心はギデオンに傾き、イスラエルの神への信頼は増していた。「その日、ヨアシユは息子を「ジェルブバアル（ヘブル語：バアルに争わせよ）」と呼び、こう言った。

集結した軍勢

すぐに危機が訪れた。そのとき、ミディアン人、アマレク人、東方の子らはみな集まって、エズレルの谷に宿営した。しかし、主の霊がギデオンの上に臨まれた。彼はラッパを吹き鳴らし、彼の父の家来の者たちが彼のもとに集められた。また、使者をアシェルとゼブルンとナフタリに送った。(33-35節)。事態は急速に進展し、ギデオンはすぐに、イスラエルの敵を攻撃するために彼のリーダーシップに従おうとする軍隊に取り囲まれていることに気づいた。ギデオンにとって、父の家で最も小さい者とされていたこの出来事は、かなり圧倒的なものであったに違いない。

ギデオンは神に言った、「もし、あなたが言われたように、私の手によってイスラエルを救ってくださるなら、見よ、私は羊毛のフリースを床に置こう。もし、露がそのフリースにだけかかり、その周りの地がすべて乾いているなら、私は、あなたが言われたように、私の手によってイスラエルを救ってくださることを知るであろう」。(36,37節)。主はギデオンに忍耐強く接し、彼の願いを聞き入れた。翌朝、彼がそのフリースを見ると、記録にもあるように、「ボウル一杯の水」を含み、完全に濡れていた。

これで納得できるはずだったが、それでもギデオン。二重に確かめるために、彼は条件を逆転させ、二回目の試練で、フリースが乾いたままで、露が周囲の地面に落ちるように主に求めた。

ギデオンは、自分が大きなことを要求していることを悟り、神に言った。"あなたの怒りを私に対して熱くしないでください。主は再びギデオンの願いを尊重された。"ノミの上だけは乾いており、すべての地には露があった。"(39,40節)。ギデオンが生きた時代は、イスラエルの歴史の中で、国が偶像礼拝に傾き、何年もの間、敵に虐げられていた時代であった。彼は個人的な経験や観察に基づく主への信仰をほとんど何も持っていなかった。40年間ミデヤンにいたモーセのように、ギデオンもまた、自分が民を救い出すために召されていることを、さまざまな形で確信する必要があった。

このような自己確信の欠如があったからこそ、主はギデオンを見事に用いられたのである。しかし、主がギデオンに学ばせたかったもう一つの教訓があった。神はギデオンに、彼がガト（ ） 。"あなたとともにいる民は、わたしがミディアン人を彼らの手に渡すには多すぎる。"イスラエルが、わたしにむ

かって自らを誇示して、"わたしの手がわたしを救った"と言うことのないように。士師記7:2

ギデオンのもとに集まった義勇軍の当初の規模は3万2千人であった。主の指示の下、彼は部下たちに、恐れている者は自分の家に帰るように言った。「すると、民のうち二万二千人が帰り、一万人が残った。(3節)。主はギデオンに言われた。彼らを水のあるところまで連れて行きなさい。もしわたしが、『この者はあなたとともに行く』と言えば、彼は行くであろう。

テストは単純なものだった。犬が水をなめるように、舌で水をなめる者と、ひざまずいて飲む者とを分けなさい。"万人のうち、「手を口にあてて」水をなめる者は三百人しかいなかったのので、飲むのを注意深く見守ることができた。この三百人が、ギデオンが率いてミディアン人に対抗する全軍を構成することになった。

さらなる強化

イスラエルの敵の大軍がエズレルの谷に宿営していた。ギデオンは、そのような武力的な軍勢をたった三百人の兵で撃退することができるという、更なる保証を必要としていたに違いない。「その夜、主は

ギデオンに、そのしもべプラーを連れてミディアン人の陣営に行き、"彼らの言うことを聞きなさい"と指示された。主は、彼が聞いたことが、後に行われる攻撃への勇気を与えると告げられた。

このミディアン人の隊列への訪問は夜間に行われ、彼らの見張り番には気づかれなかった。「ギデオンが到着したのは、ちょうど一人の男が友人に夢を語っているときであった。私は夢を見た。丸い大麦のパンがミディアン人の陣営に落ちてきた。それはテントに勢いよくぶつかり、テントはひっくり返って倒れた。これはイスラエル人ヨアシュの子ギデオンの剣にはほかなりません。神はミディアン人と全陣営を彼の手に渡されたのです」。(13,14節)。この夢の話とその解釈を聞いたギデオンは、神が自分の軍隊として選ばれた**300**人の小さな一団が、実際にミディアン人を打ち負かすことができるという確信を得た。主がミディアンの軍勢をあなたがたの手に渡されたからである」(15節)。

ギデオンの**300**人の兵士には武器が与えられていなかったが、彼は一人一人にラッパ、土製の水差し、水差しの中に入れるランプ(たいまつ)を与えた。人類の歴史上、このように装備を整えた軍隊が他にあったらどうか。記録にはそう記されていないが、

ギデオンの戦い方と攻撃計画が主の指示によるものであったことは疑う余地がない。ギデオンは兵に武器を持たせると、兵を3つのグループに分け、下の谷に陣取るミディアンの軍勢を囲む丘の両側に配置した。ギデオンは、小部隊の一つについて。士師記 7:16

彼は皆に、自分のしたとおりにするように指示した。彼がラッパを吹いたら、彼らもラッパを吹くように。同時に、彼らは松明を隠すために使っていた投石器を壊さなければならなかった。そして、"主の剣、ギデオンの剣"と叫ぶのである。(17、18節)。先に仲間の夢を解釈したミディアン人は、"これはギデオンの剣以外にあり得ない"と言った。おそらくミディアン人の多くは、この夢とその解釈を聞いていただろう。だから、300の叫び声を聞いたとき、彼らはきっと夢が実現したと思っただろう。

ギデオンの戦略には、表面的に見える以上のものがあったようだ。ギデオンの軍隊は小規模であったが、事実上ミディアンの陣営を取り囲むように配置された。通常、ラッパを鳴らし、松明を持っているのは軍の隊長だけである。ミディアン人が三百のラッパを鳴らし、三百の松明が明滅して四方を取り囲んでいるのを見れば、自分たちがとてつもない大軍に襲われているという印象を与えるに違いない。今

日では、このような戦略を"心理戦"と呼ぶかもしれない。

300人全員がラッパを吹き鳴らし、投石器を壊し、たいまつを掲げて「主の剣、ギデオンの剣」と叫ぶと、敵の隊列に恐怖とパニックが広がった。「主は、すべての者の剣をその仲間に向けられた。(19-22節)。ミディアン人が互いに攻撃し合うと、彼らは逃げ出した。イスラエル人は追いかけて、ついに彼らの王子や王たちを捕らえて殺した。(士師記7:23-25、8:1-21)。イスラエルの勝利は完全なものとなった。

ギデオンは、聖書の中で最も謙虚で、同時に最も優れた政治家の一人である。主の使いが初めて彼に語りかけたとき、彼は自分が父の家の中で最も小さい者であることを説明し、この謙遜の精神を保ち続けた。彼は、ミディアン人が"ギデオンの剣"という表現を使うのを聞いたが、自分の小さな軍隊にこれを戦いの叫びとして使うように指示したとき、彼は神の名を加え、"主の剣、ギデオンの剣"と最初につけた。

彼の勝利が終わると、"イスラエルの人々はギデオンに言った。"あなたも、あなたの子も、あなたの子の子も、私たちが治めてください。しかし、ここ

でもまた、ギデオンの謙遜と正しい視点が現れている。主があなたがたを治められるからです」（士師記8:22,23）。（主があなたがたを治められる」（士師記8:22,23））。このように、イスラエルのこの忠実な裁判官は、民の前に主を保ち、主に従うことによってのみ、民は自由と繁栄を保つことができることを強調したのである。

ギデオンの模範と忠実な裁きの結果は、彼が生きている間だけ続いた。「ギデオンが死ぬとすぐに、
・
・
・イスラエルの子らは再び立ち返り、バアリムの後を追って淫行し、バアルベリスを自分たちの神とした。イスラエルの子らは、四方の敵の手から彼らを救い出された彼らの神、主を思い起こさなかった：イスラエルの子らは、四方の敵の手から彼らを救い出した彼らの神、主を思い起こさなかった。士師記8:33-35

エフタとその娘

ギデオンの死とその息子アビメレクの悪行の後、主によってイスラエルの問題を指揮する一連の裁判官が起こされたが、ギレアドの子エフタに至るまで、彼らに関する情報はほとんど与えられていない。エフタは勇猛果敢な男として紹介されているが、「見知らぬ女」の子であったために兄弟たちから排斥さ

れ、「兄弟たちから逃げて、トブの地に住んだ」。
士師記11:1-3

エフタの指導者としての能力、軍事家としての能力は、自分たちが社会的に優れていると思っていた人々にも認められていたようだ。イスラエルがアモン人に圧迫されるようになった時、長老たちはエフタを探し出して助けを求め、アモン人を打ち破った後、国の指導者になることを約束した。エフタはしぶしぶそれを受け入れ、以前、主の祝福があったときに他の武将がそうであったように、勝利を収めた。

しかし、エフタの名が聖なる記録の中で際立っているのは、彼の軍事的専門知識のためではなく、神の助けによって彼に与えられる勝利を予期して、彼が主に立てた誓いのためである。その誓いとは、彼が戦いから帰ってきたとき、彼の家から最初に出てきたものはすべて、いけにえとして主にささげるというものであった。

エフタが戦いから戻ると、一人っ子の幼い娘が真っ先に家から出てきて彼を迎えた。エフタはその娘を見て、服を裂き、言った！あなたは私をすっかり滅ぼしてしまった！あなたは私に災いをもたらした！

私は主に誓いを立てたが、それを取り消すことはできない」 **34,35節**。

イスラエルの高貴な人々の間では、主の前で誓いを立てることは非常に重大なことだった。ソロモンは、「誓って払わないよりは、誓わない方がよい」と書いている。(伝道の書**5:4,5**)。エフタはこの視点を持っていた。彼の誓いは、彼が予想していたよりもはるかに、費用がかかることが判明したが、このような厳粛な義務を負ってしまった以上、それを変更する方法はなかった。彼の娘は反抗しなかった。彼女は状況を理解し、記録にあるように、「私は山々を上り下りし、私と私の仲間たちの処女を嘆き悲しむことができる」**2ヶ月間だけ**を求めた。エフタはこの願いを受け入れた。二ヶ月の後、彼女は父のもとに帰り、父は誓いのとおりに彼女を身ごもった。士師記**11:36-39**

一般的には、エフタは実際に娘を生贄として捧げたと考えられている。実際、聖書の記述を何気なく読むと、そのような見方ができる。しかし、いくつかの聖書訳では、**40節**の表現は異なっている。その聖書は、イスラエルの娘たちが毎年「ギレアドのエフタの娘と一年に四日間話しに行った」と説明している。

これが "イスラエルの習慣 "になったと**39節**は説明している。エフタの娘は生きていたに違いない。そうでなければ、イスラエルの女たちは毎年彼女と話すことはできなかった。記録をより注意深く調べてみると、実際に起こったことは、**、**少女が生涯処女であり続けたことであることがわかる。イスラエル人から見れば、父親が少女に求めるのは途方もない犠牲であった。

この考えは記録からも明らかである。エフタが自分の立場を娘に説明し、彼女が二ヶ月の猶予を求めたとき、ある注釈者が説明するように、彼女は死に備えるためにこの二ヶ月を求めたのではなく、自分の処女性を嘆くために求めたのである。(士師記**11:37**)。彼女が帰ってきて、父親が "誓った誓いのおりに彼女とした "とき、"彼女は人を知らなかった "と説明されている。エフタは "主の霊 "に導かれた者であった。(29節)。モーセの律法で禁じられていたからである。申命記**12:29-31**

アモン人に勝利した後、エフタはイスラエル国内のエフライム人の反乱を鎮圧する必要があると考えた。彼らの反乱は、エフタがアモン人の征服に自分たちの助けを求めなかったと主張したところによるところが大きかった。彼らの主張は事実ではなく、エフ

タは彼らの反乱を見事に鎮圧した。エフタの生涯に関する記録は他に何もない。ただ、、彼の士師としての任期は6年間続き、彼は死んだ。士師記12:1-7

力あるサムソン

エフタの死後、他の数人の士師たちがイスラエルに仕えたが、記録には単に記されているだけである。次に注目される士師は、マノアの子サムソンである。彼は、以前にもあったように、"イスラエルの子らが主の目の前で再び悪を行った"ために、裁判官として育てられた。その罰として、"主は彼らを40年間ペリシテ人の手に渡された"。士師記13:1

サムソンの母は不妊であったが、天使が現れ、彼女に男の子が生まれることを告げた。夫のマノアはその場にいなかったので、まだ天使と認められていないこの訪問者を見ることができるよう祈った。天使との面会の間、マノアは岩の上に子供をいけにえとしてささげた。その時、彼らは天使の訪問を受けたことを知り、その天使はイスラエルにとって、彼らに生まれる子（）が非常に重要であることを印象づけた。その子は、天使が説明したように、「イスラエルをペリシテ人の手から救い出す」者となる。

主の指示に従い、サムソンの頭は幼い頃から剃られなかった。サムソンの両親は、彼が生涯ナザリ人となるよう指示されていたからである。民数記6:1-21に記されているように、ユダヤの律法の下では、ナザリ人とは、人々から切り離され、限られた期間、あるいは終生、主の奉仕に専心する者のことであった。ナザリ人の外見的特徴の一つは、髪を切っていないことであった。

サムソンはその力強さで知られている。しかし同時に、新約聖書の基準によれば、彼の個人的な生活は称賛されるべきものではない。それにもかかわらず、彼の心は神に忠実であったことは明らかであり、ヘブル人への手紙では、先に考察したギデオンやエフタと同様に、古代の信仰の英雄の一人として名前が挙げられている。ヘブル11:32

サムソンは結婚していたが、その後、ある女性と出会い、"その名をデリラといい、愛していた"（士師記16:4）。（士師記16:4）。彼女に迫られた後、彼はデリラに、自分の強さの秘密は髪にあると明かした（15-17節）。ここから、彼の髪から体へと力が流れる神秘的な方法があったとは考えられない。彼が神への献身の象徴である髪を保っている限り、彼

に関して記録されている力強い偉業を成し遂げる力が主から与えられたということであろう。

サムソンの髪に関する秘密を知ったデリラは、サムソンが眠っている間に、男に髪を切らせようとした。おそらく、サムソンがデリラとの交際で神に捧げる誓いを破っていなければ、主はこのようなことを許されなかつただろう。彼の髪がなくなったので、主は支援を取りやめ、ペリシテ人はサムソンを捕らえ、目を摘出し、牢獄に入れた。

サムソンは、主が与えてくださった力によって、長い間ペリシテ人を苦しめていたので、ペリシテ人は今、彼を支配下に置いているという事実を喜んだ。彼らは、真鍮の枷で彼を縛ることによって、彼が自分たちから逃げ出さないことを二重に確かめた。強大なサムソンに対するこの勝利を祝うために、ペリシテ人の領主たちは、彼らの神ダゴンにいけにえをささげるために集まった。

この集まりは彼らの異教の神殿で、大集会であった。「ペリシテ人の諸侯はみなそこにおり、屋根の上には三千人ほどの男女がいて、サムソンがスポーツをしている間、その様子を見ていた。(25-27節)。強大なサムソンにとって、なんという屈辱であろうか！

状況はすぐに変わった。サムソンの信仰が救いの手を差し伸べたのだ。彼の髪は再び伸び始め、彼はペリシテ人に復讐するために、もう一度自分を助けてくれるよう主に願った。その後のことはよく知られている。彼は、建物の屋根を支えていた二本の柱の間に身を横たえて、その柱を引き離した。こうして、彼が死ぬときに殺した死者は、彼が生前に殺した死者よりも多かった」。

ここでもまた、ペリシテ人の神殿を倒したのは、主から特別に与えられた力であったと考えなければならない。サムソンの力によるすべての功績は、エリコの城壁の破壊や紅海の裂け目と同じように奇跡であった。ただ、私たちの神がご自分の目的を達成するために用いる方法において、何ら制限されることがないということを説明するのに役立つということを除いては。

未来の審判

キリストとその忠実な従者である現代人は、将来の裁きの時に裁く者となる。(使徒17:31、1コリント6:2)。イスラエルが神の律法に従わなかったために敵の束縛を受けたように、現在、全世界は罪と死の束縛を受けている-ユダヤ人も異邦人も同様であ

る。しかし、神はやがて、この偉大な責任のためにあらかじめ準備された裁き人を起こし、彼らを通して、喜んで従うすべての人類を死から救い出されるであろう。それは栄光に満ちた展望である！